

## 天児慧先生と現代中国研究所

青 山 瑠 妙（早稲田大学アジア太平洋研究科教授）

早稲田大学の現代中国研究所は早稲田大学の中国研究の窓口であるだけでなく、他大学の中国研究に携わる学者や研究機関との連携が緊密であることから、実際のところ、日本の中国研究を代表する中核機構である。

天児先生は現代中国研究所の特性を誰よりも一番認識している。天児先生が現代中国研究所の所長に就任したのは2010年のことである。早稲田大学の中国研究拠点のリーダーは、2007年から2012年までグローバルCOE「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」拠点リーダーを、そして2010年から人間文化研究機構（NIHU）現代中国地域研究プログラム代表をも兼ねている。こうした背景もあり、早稲田大学の現代中国研究所は日本の現代中国研究を統括し、推し進めるうえで非常に重要な役割を果たしている。現代中国研究所の所長に就任した天児先生は日本の中国研究の中核拠点代表としての重大な責任を常々口にされ、そしてその責任を果たすために尽力され、また多大な実績をあげてきた。

早稲田大学の中国研究拠点では、国際関係の中の「超大国」、経済グローバル化の中の「超大国」、社会の成熟と「超大国」、「帝国」史の中の「超大国」という4つの視角から、現代中国に関する総合的な研究を深め、その成果を出版物として、あるいはシンポジウム・ワークショップなどを通して国内外に示してきた。NIHUプログラムの集大成として、韓国の成均館大学との合同シンポジウム *New Horizon in China Studies* がソウルで開催された。これにより国内の研究者間はもちろん、海外の研究者とのネットワーク化が大きく進展した。

このようにして構築されたネットワークが下敷きとなり、日本の研究成果が広く海外へ発信されている。特に天児所長時代の早稲田大学では、早稲田大学のみならず、ほかの拠点と連携を取りながら、統括的に日本の中国研究の海外発信に努力した。

中文年報『日本当代中国研究』（年1回）は中国の大手学術出版社である中国社会科学文献出版社からの発行に成功した。同社のホームページのオンラインにも掲載され、日本における中国研究の各成果をアピールしている。中国を訪れると、多くの研究仲間や学生たちに、「先生の～～の論文を読みましたよ」と声をかけられることもたびたびであるが、研究成果が中国において中国語で出版され、ネットで発信される重要性をひしひしと痛感する瞬間である。

また早稲田大学では、英文ジャーナル *Journal of Contemporary Chinese Studies*（年2回）を出版し、日本の中国研究の成果を発信している。英文ジャーナルの発行に踏み切る議論のなかで、当初、発行には少なからざる慎重論があった。英文ジャーナルはいつまで続けられるのか、英語の学術論文としての質をどのように確保するのかなど、解決すべき課題が山積みだったため、後ろ向きの議論になりがちであった。しかしこうした慎重論が盛り上がるたびに、天児先生は頑として日本のすぐれた研究成果を世界に向けて発信する必要性を強く主張され、次世代の国際派のために土台作りをとの意気込みで取り組んだ。英文ジャーナルの発刊を孤軍奮闘の努力により実現させたのである。英文ジャーナルの構成を考案する際に、天児先生は早稲田大学に固執せず、個別の大学や研究機関の枠組みを超え、

日本全体の研究成果の発信を強く意識した。

その後、英文ジャーナル *Journal of Contemporary Chinese Studies* の実績が評価されて、2017 年より国際的な大手学術出版社の Routledge 社からその刊行のジャーナルとして発行されている。研究分野の拡大を受けて、雑誌のタイトルは *Journal of Contemporary Asian Studies* に変更した。Taylor & Francis Online に入っており、世界中からアクセスできるようになっている。

さらに、若手研究者の人材育成においても成果を上げている。NIHU の支援により、各拠点に各 1 名（中心拠点事業を行う早稲田大学は 2 名）の研究者が派遣され、派遣された研究者を中心に各拠点において若手研究者の活動の場を拡大することができた。こうした研究者の多くが現在、様々な大学や研究機関で専門の仕事に就いている。また若手研究者育成の観点から、若手研究者の学術論文を現代中国研究叢書というシリーズとしてこれまでの 5 年間に 18 冊を出版した。

このように中国研究所所長として天児先生は大きな成果を残されたが、所長として能力を発揮できたことは天児先生のお人柄があったからに他ならない。

天児先生は早稲田大学の中国研究所所長でありながらも、早稲田大学という「個」を超えて、日本の研究者全体のことを考えている。早稲田大学に対する愛校精神は人一倍強かったにもかかわらず、中国研究については日本全体の研究を世界に発信しようとの責任感のほうがはるかに強い。中国研究所の所長を務めながら、天児先生の目線は常に日本の中国研究、世界の中国研究にあったように思う。

人づくりを天児先生は最も重要視してきた。「若い研究者の研究の芽をつぶしていけない」。「学生のいいところを引き出すのが教員の役目」。これは天児先生が常々繰り返しているモットーである。天児先生の尽力で NIHU の支援を得て若手研究者に活動の場を新たに創出し、また若手研究者の成果物出版を推進して、温かく、そして若手研究者をそれぞれの未来に向けてその背中を強く押し続けてきた。

天児先生の親しみやすさは表裏のないによるところが大きい。一言でいえば、「大きな度量で人を包み込む、とてもおおらかな性格の持ち主」である。自分より若い世代に窮屈な上下関係を押し付けることもない。こうした性格が、若い研究者に自分の意見を披瀝しやすい環境を作り出している。育ち盛りの研究者は自由かつのびのびとした研究環境のなかですくすく育つ。天児先生はこうした雰囲気作りの名手である。若い研究者が天児先生の研究に対して辛口の批評をしても、にこやかに聞いているばかりか、批判は大歓迎といって楽しんでいる風である。

年齢を感じさせないエネルギーなどところは、天児先生と接している人々が共通に感じているところであろう。もちろん天児先生のすぐれた研究業績の膨大な蓄積もこうしたエネルギーな性格の賜物といえる。また、大きなプロジェクトは企画が大きくなればなるほど、やはり大きなエネルギーが必要となる。野球で鍛えられたエネルギーな体力、企画を進めるスピードの速さは、若い研究者や助手ですらついていくのが精いっぱいである。天児先生のこうした大きなプロジェクトを遂行するために必要な人の力を結集する人間的な魅力とプロジェクトを成し遂げるエネルギーとがもし欠如していたならば、現代中国地域研究プログラム、そして早稲田大学アジア研究機構現代中国研究所は今日のように発展していなかっただろう。

早稲田大学中国研究所を語るうえで大きすぎる存在である天児先生が大学を去るのはとても寂しい。しかしながら、天児先生は今後も引き続き現代中国研究所の活動を力強く後押ししていただけると確信している。